

(2013年度)

国語

次に示すのは、高野秀行『またやぶけの夕焼け』（集英社）の一節である。小学校四年生の「僕」や「シゲオ」は、一つ年上の「カッチャン」といつも遊んでいる。「ユーリン」は「僕」の弟で一年生、「ミンミン」は「カッチャン」の弟である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

お昼ごはんはコロッケをたらふく食べてから、僕はカッチャンたちとユドノに出かけた。

怒られるようなことをしたとき、お母さんはよく「今日は遊びに行っちゃダメ！」と言うのだけど、幸い、この日は大丈夫だった。おでこにボールペンでブッチャーの傷を描くというのは、①マジメなお母さんにもおかしかったらしく、あとでくすくす笑っていたからだ。その代わり、ユーリンをおいて一人で出かけようとしたら、「連れて行ってあげなさい」と言われてしまった。どうしてお母さんはわざわざ問題が起きるように②シムけるのだろう。

僕は釣り竿と網を肩に担ぎ、道具箱とビクを手にもらさげて出かけた。

夏はクワガタ捕りのシーズンであるが、魚捕りのシーズンでもある。

通称「ユドノ」こと湯殿川がその舞台だ。捕れるのはフナ、ハヤの他、ドジョウ、ダボハゼ、ウグイ、タナゴなど。たまに誰かが③スでたらしい金魚も捕れた。ザリガニもいる。いつもは川にざぶざぶ入って、網で魚を直接すくう「魚捕り」をやるが、今日はカッチャンが「たまには釣りをしようぜ」と言うので、そうだった。僕は釣り道具もいちおう持っていた。

「あちいな」

外はかんかん照りだった。首筋や手が日差しにじりじり焼ける音が聞こえそうなくらいだ。アブラゼミやミンミンゼミがやかましく鳴き、ときおり、暑さに頭がおかしくなったかのようにモンシロチョウの群れが乱れ飛んでいた。早足で歩くと、顔から汗が噴き出す。ユーリンも小走りについてくる。

ときどきバツタを網で捕まえては川に④ホウリ込んだりしながら、「ボロ橋」に着いた。お父さんが子どものときからあるという本当に古くてボロい木造の橋だ。ここがいつも出発点。あるときは上流の片倉城址^{じょうし}方面にさかのぼり、あるときは下流の北野方面に下る。

ボロ橋は魚捕りの集合ポイントだけでなく、釣りをするにもいい場所なのだ。川が最も深い。僕の胸くらいまである。

カッチャン、シゲオ、ミンミンたちは先に来ていた。みんなにユーリンのブッチャー傷を見せたらゲラゲラ笑った。

「ヒデ、それ、最高だぜ！」とカッチャンが笑いながら言った。僕はそれだけで午前中の苦労が⑤ムクわれたような気がした。

カッチャンはユーリンのことを「ユーリンじゃなくてブーリンだ！」と⑥メイメイし、ユーリンが怒るのも無視してからかった。やっぱり、⑦この軍団の仲間たちはわかっている。みんなと一緒にいると、どうしてこんなに楽しいんだろう。

ところがその日の釣りはうまくいかなかった。どこかの中学生らしき子たちが先に来て釣りをしていたのだ。ボロ橋がユドノ最高の釣りポイントなので僕たちは順番を待っていた。暇なので、ボロ橋を橋げたから上までよじ登る⑧キョウソウなどをした。僕は体力はなかったけど運動神経はいいので、このボロ橋登りキョウソウは得意だ。動物園のサルのように、何度も何度も橋げたをするする登っては、またするする降りるということを繰り返した。もう顔からTシャツまで汗びっしょりだ。

ところがいつになっても中学生は場所を移らない。しかたなく、横で始めたら、「邪魔だ」と中学生に怒鳴られてしまった。離れたところで釣り糸を⑨タれるが、もともと下手だからちっともかからない。魚のいそうな水辺の草むら近くに針を投げると今度は草に針がひっかかってしまう。そのうちシゲオが「こんなとこでじっと待ってるのはバカらしい。あそこに網を突っ込めば一発だ」と⑩もつともなことを言った。

「そうだよな」とみんなの⑪ナットクした。だって、すぐ目の前にあるんだから。釣りはポイントを選ばなければならないが、魚捕りは岸

辺の草が②刈り茂ったようなところに片っ端から網を突っ込んでガサガサ揺さぶるだけだ。それでけっこう魚やザリガニが捕れる。

シゲオは実は魚捕り名人だ。シゲオは何をやっても不器用で、しかも他人のやり方を真似しないという頑固なやつだったが、それだけにとどまらずごく独創的な方法を編み出していた。

やつの欠点は、自分の発見を人になかなか教えないことだった。例えば、「いっけん」という変な名前の森が僕の家近くにある。そこにヤマタノオロチみたいな形のクヌギの木があつて、ときどきコクワガタが捕れた。そこでシゲオは一人で行き、何か人とはちがった方法でクワガタをよく捕っていた。

「人のやり方は真似しない。だから人にも教えない」という信念は筋が通っていたけど、僕たちは「シゲオはケチ」とよくからかった。ただ、教えないとは言つても、そんなに複雑なことをやるわけじゃない。「いっけん」のヤマタノオロチに関しては、木の裏側の地面を掘るとなぜかそこにクワガタが潜っているのだった。掘り返した跡があるのですぐにわかつてしまった。

不思議なことに、魚捕りのコツだけではどうしてもわからないままだ。棒を使って魚を網に誘い込むのは見ていればわかる。だが真似しても僕たちの網には魚は入ってこない。カッチャンさえもだ。

「どうやるの？」と訊いても、③シゲオはいつもどおりにやにやしているだけだった。

さて、この日、シゲオの一言で僕たちは釣り竿を投げ出し、網に持ちかえた。

僕たちは石の上をびよんびよん跳んでいき、柄を目一杯伸ばして、網を使った。できることなら靴をぬらしたくないのだ。ぬらすと「泥が中に詰っているし、生臭い臭いがする」とお母さんが言い、洗わされることになる。それがかったるいのだ。

でも、ポイントは反対側の岸だから、網がちゃんと届かない。曲芸を続けていると、つるつと足がすべってばしゅと水の中に落ちた。

あーあ、と思うが、ぬれてしまうと、ふつきれる。歩くと、靴の中に水が出入りしてぐちゃちゃん、ぐちゃちゃんと音を立て、そのたびに少しぬるくなった水が出て、冷たい水が入ってくる。川と足が直接、息をしあっているみたいだ。

「魚捕りをやってる！」という気分になってきた。誰もが同じ気持ちのようで、みんな、ぐちゃちゃんぐちゃちゃんいい出すと、川のどんな場所でもどんどん入っていく。もうズボンがぬれようが、シャツがぬれようが知ったことじゃない。なんせ暑いからキンタマまで水にかかるとうっとりするほど気持ちいい。

川原に近い浅いところで移動しているとき、みんな水キック合戦となる。水の中でただ足をけるだけで水が飛んで相手にかかるのだ。僕はさっきの続きで十六文キックでプーリンことユーリンに水をさぶさぶぶっつけた。プーリンは顔にもろに水がかかり、うわつと叫ぶ。

④つくづく「魚捕りはいいな」と思う。釣りではこんなことはできない。じつとしていないといけない。

ところがこの日はさらなる問題が勃発した。シゲオが「五人は多い」と言い出したのだ。たしかに魚捕りは同時に三人がふつうで、四人でも多い。ポイントは一ヶ所につき一回しか網を入れられないから、人数が増えれば増えるほど、順番待ちの時間が増える。

でも、せっかくみんな来ているのに、そんなことを言うのは我がままじゃないか。だが、シゲオは魚捕りに特別なこだわりがある。僕はなんだか腹が立った。自分の技をメンバーに教えないし、勝手なことを言うし。

「おまえだけ他の場所に行けばいいだろ」と思わず言うと、シゲオもムツとして、「じゃあ、俺、あっち行くよ」と下流を指差した。意外にも、「僕もシゲオと一緒に行く」とユーリンが言った。ユーリンはミソツ子だから、仲間割れしたときにはたいてい多数派につく。しかも、シゲオはユーリンよりずっと年上だし、気難しすぎる。年下の子の面倒なんて絶対みない。

だから僕は驚いたのだが、ユーリンにしたら、少ない人数のほうが網をたくさん入れさせてもらえと思ったのだろう。今日は朝からさんざん僕にスパルタを受けていて、うんざりだという気持ちもあったかもしれない。

「裏切り者！」と僕はののしった。

「裏切り者でけっこうコケコッコウだ！」憎たらしい顔でユーリンは言い返した。「こっちのほうが魚がたくさん捕れるもんね」

「バカだな」と僕は弟に言った。「シゲオは全部、自分で捕っちゃうぞ」

ユーリンは口をとがらせ、一瞬「しまった」という顔をした。振り返ると⑤案の定、シゲオはユーリンのことなどほったらかしてどん

どん歩いていくので、⑥ユーリンはあわてて後を追って走り出した。

「バツカでえ」とミンミンが言い、僕らはどつと笑った。

あれで大丈夫かと思つたが、すぐ自分に言い聞かせた。

まあ、いい。これもスバルタだ。

僕たちはシゲオたちと反対に、三人で上流へさかのぼりはじめた。もうあまりしゃべらず、魚捕りに精を出した。フナとハヤがけつこう捕れたし、水は気持ちいい。

ものすごく巨大なアメリカザリガニが網の中に入った。水草をからませた大きなはさみをふりかざし、こつちを威嚇^{いかく}している。

「やった！ ザリチョ捕りい！」

「うわ、でけえ！」

「怪獣みたいだ」

カッチャンが自分の捕ったザリガニを無理やり僕のザリガニと戦わせる。

「またやぶけ」を通り過ぎ、ゴルフ練習場の裏の水をせき止めているところも通り過ぎ、そのまま片倉城址まで行ってしまった。二キロ以上川を歩いたことになる。魚捕りとしては相当な距離だ。獲物も充実していた。

最高に気分がいいけど、頭の隅で「ユーリンはどうしたんだろう」という思いが消えない。こつちが楽しければ楽しいほど気になる。

夕方になり、僕たちは川から上がって、ボロ橋に戻った。

自転車はそのまま、シゲオとユーリンの姿は見えない。

「あいつら、いったいどこまで行つたんだろう」僕たちは「A」。

シゲオとユーリンが仲良く魚を捕っているという姿は想像できなかった。頭に浮かぶのは、シゲオがゴンゴン魚を捕りながら進み、ユーリンが息をはあはあさせ、ときには水の中でぬるぬるした藻にすべって転んだりしながら必死でついていく光景だ。ユーリンのおでこにはまだ青のボールペンの跡がついている。そのマヌケな顔で、でも意地っ張りな弟は泣くのをこらえて、シゲオの後を追いかけている。

だんだん落ち着かなくなってきた。⑦シゲオ、ふざけんなよと言いたいような気持ちだ。

日が高尾山の方角に落ち、辺りは暗くなってきた。そろそろ家に帰らないとヤバイ。心配していたら、東のほうから大小、二つの影が近づいてきた。大きい影は長い網を、小さい影は短い網を同じように担いでいる。

シゲオとユーリンだった。

「どうだった？」僕が訊くと、シゲオは得意気にビクを持ち上げた。そこに魚が六匹も入っていたのはともかく、いちばん大きいウグイをさし、ユーリンが「これ、僕が捕った！」と誇らしげな顔をしたのに驚いた。

シゲオも満更でない顔つきだ。

「俺がコツを教えてやったからな」シゲオは言う。

「え、コツ？ どんなやつなの？」僕が訊くとユーリンはえへへと笑った。「秘密だよ」

「ね？」とシゲオに言くと、シゲオも「オウ」。

まったく僕のあずかり知らぬところで、二人は仲良くなっていた。⑧僕はなんだか悔しいような、嬉しいような、変な気持ちになった。

「ユーリン、帰るぞ！」僕が強く言くと、ユーリンは「うん」と答え、二人で歩き出した。

ぐつちゃん、ぐつちゃんという水入りズックの音が虫の声にまじって響いた。

問1 — ㊦㊧㊨のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 — ②「もっともなこと」について、ここでの意味として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 一番いいこと イ 当たり前のこと ウ 少しはましなこと エ より楽しそうなこと オ すぐに思い浮かぶこと

問3 — ③「シゲオはいつもどおりにやにやしているだけだった」について、このときの「僕」の気持ちとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア やり方を教えないシゲオが大人げなく見えて情けなく思っている
 イ やり方を教えないシゲオには勝てずにごいやつだと思っている
 ウ やり方を教えないシゲオを相手にするのはやめようと思っている
 エ やり方を教えないシゲオをいやなやつだと腹立たしく思っている
 オ やり方を教えないシゲオを今日こそ見返してやろうと思っている

問4 — ④「つくづく「魚捕りはいいな」と思う」について、どうしてこのように思ったのか、自分のことばで説明しなさい。

問5 — ⑤「案の定」について、ここでの意味として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア もう イ やはり ウ すっかり エ 思いがけず オ いつの間にか

問6 — ⑥「ユーリンはあわてて後を追って走り出した」について、このときの「僕」の気持ちを自分のことばで説明しなさい。

問7 — ㊦に当てはまる語句として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 首をすくめた イ 首をそらした ウ 首をたらした エ 首をのばした オ 首をひねった

問8 — ⑦「シゲオ、ふざけんよと言いたような気持ちだ」について、このときの気持ちを説明したものとしてふさわしくないものをひとつ選び、記号で答えなさい。

ア 好き勝手に時間も気にせず遊びまわっているシゲオを腹立たしく思う気持ち
 イ シゲオと一緒にいる弟は楽しく遊んでいるのだからかと不安に思う気持ち
 ウ 弟の面倒を見てくれてありがたいけどもう一緒に帰りたいと思う気持ち
 エ 自分達抜きで気ままに楽しんでいるシゲオをうらやましく思う気持ち
 オ 弟はつらい思いをせずに無事に戻ってくれるだろうかと祈る気持ち

問9 — ⑧「僕はなんだか悔しいような、嬉しいような、変な気持ちになった」とあるが、このときの「悔しい」部分と「嬉しい」部分について、それぞれ具体的に述べなさい。

問10 — ①「この軍団の仲間たち」とは、「僕」にとつてどのような存在か、文章全体を踏まえて八十字以内で説明しなさい。

問11 夏に友達と一緒に遊んだときの経験を具体的に教えてください。

[illegible]

受験番号	
氏 名	

[illegible]